「そうだろう。ウサギ……服を全て脱げ」
「……はい」
ウサギは恥じらいつつ、上着のボタンに手をかけ、服を脱ぎ始めた。
上着を脱ぐと、白いブラウスのボタンがはち切れてしまいそうなほどの豊満な胸。
そのボタンを一つ一つ外していくと、黒のブラに包まれた、ハリのある二つの乳房の谷間が、うっすら滲んだ汗で、卑猥にビカビカと光っている。
次に、タイトスカートのジッパーを下ろし、スカートはハラリと床に落ちる。
現れたのは、僅かに弛んで肉の余った、しかし、それゆえに熟した女性ならではの官能美を備えたウエスト。
同じく、熟しすぎて中身がパンパンに張っている果実のような、見事な太もも。
しかし、なによりも俺の目を惹いたのは、やはりその胸だった。
「Gカップだったな、ウサギ」
俺はニヤニヤと笑いながら、無遠慮にウサギの胸をのぞき込む。
「……はい」
ウサギは俺のいやらしい視線を、まるで愛撫を受けているように頬を赤らめなが

ら、嬉しそうに受け止めている。
ブラから今にも溢れてしまいそうなほどの巨乳……。
「ブラも取るんだ」
「……はい」
現れたウサギの乳房に、俺は言葉を失った。
３０歳を過ぎたというのに、ほとんどたれていないその乳房は、ギョッとしてしまうほどに美しかったのだ。
乳輪と乳頭は、濃い紫がかったピンク色……。
「良い乳房だ。ウサギ。先ほど俺が倒れ込んだときも、実は感じていたんじゃないのか？」
「そんな……」
「そうそう。そのあと、お前は、こともあろうに、この俺様に平手打ちを食らわせてくれたっけな？　なあ？」
「……あれは……」
「あれは？　なんだ？　俺が主人だったと知らなかったと言いたいのか？　だが、

実際に、俺はお前の主人だった。お前は……奴隷であるお前は、主人である俺に手をあげた。その事実は変わらない。違うか？　これは奴隷として許されることかな？え？」

「……許されることでは……ありません……」

ウサギは消え入りそうなか細い声で、恐る恐る言った。

「そうだな……。そんなお前には、お仕置きが必要だ。どうだ？」

お仕置き。

その言葉に、ウサギは反応する。

「……はい。私は、不服従で悪い奴隷です……そのような私には……」

「そのような私には？」

「……ご主人様のお仕置きが必要です……」

ウサギの頬は真っ赤に染まっている。

まるで自分の発する言葉に、これから起きる事に興奮しているように。

「よろしい。では、パンティも脱ぐんだ」

「……はい」

ウサギは、ゆっくりと黒いパンティーを下ろした。
俺の目の中に、濃い暗黒密林が姿を現す。
それは、力強い黒針のように素晴らしく美しい陰毛群だった。
「次に、後ろを向き、両手を後ろに回せ」
「……はい」
俺は持ってきた鞄の中から縄を出し、ウサギの両手を後ろで強く、ガッチリ縛り付けた。
今日この日のために、俺は様々な道具を用意していたのだ。
「あ……ん……」
「痛いか？」
「……い、いいえ……」
「痛いとすれば、それは、おまえの不服従が招いた痛みなんだよ。ウサギ。だから、その痛みを自分の中に刻み込め。そして、以後、このようなことは二度とあってはならないのだ」
――――――中略――――――

「では、お仕置きをはじめるとしようか」
俺は、ズボンと靴下を脱ぐ。
そして、素足の親指を、ゆっくりとウサギの秘部に当てる。
ヌチュっとした感触が俺の足の親指に伝わってくる。
「はぅ……ああ……」
「今のお前などには、口や手などもってのほか。足の指で十分だ。だが、感じているようだな？　ウサギ」
「はい……、ご主人様の足の指が、私のアソコに当たって、気持ちいい……です……はぁん！」
俺は親指をクニクニと動かし、ウサギの恥裂を刺激した。
間もなく、俺の足の指はウサギの愛液でベトベトになってしまった。
「汚れたな……。ウサギ、俺の足がお前の汚い液で汚れてしまったよ。かなわんな……。綺麗にしてくれるか？」
俺は、そういうと、ウサギの顔の前に足を上げた。
「……はい……綺麗にいたします……」

ウサギはそう言うと俺の親指をネットリといやらしい唇で包み込んだ。
「綺麗にするんだぞ。でないと、最後のご褒美は無しだ」
絡みつくウサギの舌は柔らかく、俺の指を口の中で舐め回し続ける。
ペチョペチョと淫靡な擬音がホテルの部屋の中に響く。
「もっといやらしく、もっと優しくだ」
「はい……」
足の先から伝わってくる快楽。
それは、俺の頭のてっぺんまで突き抜けるように、全身を駆け抜けていく。
「いいぞ……。ほら、見ろ。俺のモノを……」
俺は、自分のパンツを脱ぎ、モノをウサギに見せる。
「……ご主人様の……ご主人様の……」
「そうだ。お前のいやらしい舌使いのおかげで、俺のはこんなに大きくなっている」
「……はい……大きいです……すごく……」
ウサギは、物欲しそうな、哀願するような表情で、俺のモノをじっと見つめている。

「欲しいか？」
俺は、意地悪くウサギに聞く。
「……。はい……」
「俺のチンポが欲しいんだな？」
「……はい。わたしは……ご主人様のおチンポが欲しくてたまりません……もう、我慢が……出来ません……」
「では、奉仕するのだ。ウサギ。　お前の思いつく最高の方法で、な」
そういうと、俺はウサギの両手を縛った縄を外してやる。
ウサギは少し考えた様子だったが、すぐに俺に言った。
「ご主人様……ご奉仕させてください……」
「ふむ。どうやって奉仕するんだ？」
「私の……乳房と、口で……」
「ほう、上手くできるかな？」
「一生懸命に……ウサギは、一生懸命奉仕させていただきます……」
「よし、では、やってもらおうか」

ウサギは俺のモノを、その巨大な乳房で挟み込む。
俺の肉棒に伝わってくる、柔らかでまろやかな感触。
そして、ウサギは乳房の谷から顔を出した俺の亀頭を、チロチロと舌先で舐め始める。
「ああ……なかなか、上手いじゃないか。お前の旦那にも同じ事をしているのかな？ウサギ？」
「……いいえ……こんな事、主人にはしたこと……」
「そうか。ならば、お前は頭の中で想像してたんだな。普段一人でいるとき、頭の中で自分の乳を使って男のモノを、こんな風にしてみたいと、そのイヤラシイ頭の中で考えていたわけだ？」
「……はい……考えてました」
「スケベな女だ。淫らなメスブタめ。もっと、刺激を強めろ。ウサギ。でないと、俺の精液は、与えてやらないぞ」
「ご主人様の……精液……」
「そうだ。俺のドロドロした、臭いの強いスペルマだ。欲しいんだろ？　味わいた

いだろ？」
「……欲しい……飲みたい……ご主人様の……精液」
「ならば、もっと奉仕するのだ。お前の出来る限りの最善の事を」
ウサギは、俺の言葉に従い、舌使いをさらに過激にしていく。
ジュポジュポとバキュームしたと思えば、キスするように優しく亀頭を愛撫する。
その刺激の緩急に、俺の快楽は急激に加速する。
「いいぞ……ウサギ……おれはイキそうだ。ああ……出すぞ……ウサギ……」
「……出して……ください……」
「ああ……ウサギ……出る！　受け止めてくれ……おまえのスケベなその口で！」
瞬間、俺はウサギの口内に射精した。
ドクンドクンドクンと、俺の亀頭は熱いスペルマを、吐き出した。
「ウサギ。一滴もこぼしてはならないぞ。全て飲むんだ！！」
ウサギは言われたとおり、ゴクリと喉を鳴らし俺の精液を飲み込んだ。
「ああ……この味……」
「美味しいか？」

「……はい……ご主人様のスペルマは、濃くて臭いが強くて……最高の味です……」
恍惚とした表情で、俺の精液の味をかみしめ、舌なめずりをするウサギ。
「ウサギ……」
「ご主人様……」
「おまえは、素晴らしい奴隷だ。今日、俺に会った時はびっくりしただろう。だが、お前はそれに耐えた。俺の様々な命令にも、従ってきた」
「……はい」
「だから、お前にご褒美をやろう」
「……ご褒美……」
ご褒美。この言葉にウサギは反応し、顔を紅潮させる。
「何が、欲しい？」
「何が……？」
「そうだ。お前の今、一番欲しいモノをやろう」
「わたしの……一番欲しいモノ……？」
「そうだ……」

「わたしが欲しいモノ……それは……」
ウサギはうつむき気味に恥じらいながら続ける。
こいつの答えは分かっている。
あえて言わせるのも、調教のうちなのだ。
「さあ、言ってごらん？」
「……わたしの欲しいモノ……それは……ご主人様のおチンポです……」
「……お前の欲しいモノはそれなんだな……？」
「……はい……わたしはずっとずっと夢見てきました。ご主人様の命令を受けているときも、ずっと。きっと、わたしが従順にしていれば、ご主人様は与えてくれるはずだと……。ご主人様の……おチンポを……」
「……ウサギ……」
そう言うウサギには、ある種の歓喜の表情さえ見て取れた。
ウサギは今、普段決して表に出せない欲望を、赤裸々に告白したのだ……。
俺は、調教とはいえ、そんなウサギに感動を覚えてしまう。
いや、むしろ、この感動は正しいものなのかもしれない。

ＳＭ。主人と奴隷の関係。
それは、決して強制で生まれるモノではない。
双方共々が、心からその関係を望んでいるからこそ、最高の快楽が生まれるのだ。
俺はその時、心底嬉しく思った。
まさに、その関係が俺とウサギの間に生まれていると確信したからだ。
「ウサギ……ベッドへ来るんだ」
「……はい」
俺とウサギはベッドの上に移る。
「ウサギ……四つんばいになれ。そして、尻をこちらに向けろ」
「……はい」
ウサギは従順に俺の言うとおりの格好になる。
大きな、ボリューム満点の、肉感豊かなヒップが俺の前に現れる。
なんて美しいのだろうと、俺は驚嘆してしまう。
「良いヒップだな、ウサギ。最高に美しい尻だ」
俺はそういうと、人差し指をウサギの美尻に近づける。

「あ……！　ご主人様……そっちは……！」
そう。俺が指を入れた先は、ウサギの陰部ではなく、アナルだった。
盛り上がった二つの桃肉の谷間をこじ開け、無数の皺が渦をなすその中心に、俺の淫指は突撃した。
「嫌なのか？　ウサギ……？」
「……いいえ……」
「まさか、不満と言うわけではあるまいな？　俺の褒美が、受け入れられないなんて？」
「……そんなことは、ありません……あぁ！」
「ほら、ヒクヒクしているじゃないか？お前の尻の穴は、俺の肉棒をほしがっているように見えるぞ？」
「……はい……私のお尻の穴は、欲しがっています……。ご主人様の……おちんぽを……」
俺はニヤリとすると、ウサギの穴に一気に俺のいきり立つ肉棒を差し込んだ。
「はぅ！！……あぁ……おしりに…あっおっ…っぐ…おしりに……ああぁ！」

「そうだ、お前の尻の穴は、俺の肉棒を、パックリくわえ込んでいる。イヤラシイ、下の口だよ、ここは！」

俺は、そういうと、腰の運動をゆっくりと始める。

恥裂とは違う魅力を持つこちら側の穴の締め付け。

肉棒が出るたびに、そして入るたびに、ウサギは快楽の声を絞り出す。

「ご主人様の……ご主人様の…はぁあ…熱くて……固いおちんぽが……ウサギのお尻の穴に入ってますぅ！……ああ……うあぁ……あん！」

当然ながら、ウサギのアナルは未開発だったのだろう。

締まりは最高。

俺は、ウサギの上に覆い被さり、背後から豊かな巨乳を揉みしだく。

柔らかな乳肉は、俺の握力に押しつぶされ、指の間から溢れ出すように変形する。

「あぁ……気持ちいい……おしりは……はじめてなのに……ああ、すごく……っぐっ…あっキツくて……っあ、気持ちいいですぅ……」

続きは製品版でお楽しみ下さい。